

[上水道関連年表]

年	月	内容
大正7年(1918)	11月	県に上水道工事予算の補助を申請するも却下される。
昭和2年(1927)	3月	上水道敷設運動が起こる。町民から上水道敷設の請願書が提出され、長崎町議会で採択されるが実現されず。
昭和21年(1946)	9月	長崎町(現長崎地区)で集団赤痢発生
昭和26年(1951)	-	大洪水発生。飲料水がなくなり、上水道敷設運動が再燃する。
昭和29年(1954)	10月	長崎町・豊田村が合併し、中山町が誕生
昭和30年(1955)	2月	上水道敷設が町議会で可決。翌年から着工された。
昭和32年(1957)	11月	中山町上水道工事完了
昭和42年(1967)	4月	最上川中部水道企業団発足



【図】村山広域水道の給水エリア

洪水、感染症の発生。『長崎に嫁はやれぬ』とまじい...。

まだ水道が普及していなかった頃、人々は湧水や川の水、井戸水などをこして飲み水にしていました。しかし、これらの水は今私たちが使っている水道水とは違って、鉄分や細かな泥を取り除く処理や消毒がされていませんでしたので、病気や伝染病の原因となることもありました。

中山町でも、昭和21年に長崎町(現在の長崎地区)で赤痢の集団発生が起こり、29名が犠牲になるという痛ましい事件がありました。さらに、昭和26年には大洪水が発生し、水が濁り、飲料水の確保ができないという事態に陥りました。

当時、中山町は最上川流域にあって、有名だったようで、その苦労から、昭和30年8月の新聞に『長崎に嫁はやれぬ』と古くから言われている町』と不名誉な記載があるほどです。

「中山町水道史」によると、上水道(飲料水を供給する設備のこと)が敷設されたのは昭和32年(1957)のこと。一方、飲料水確保に苦労する住民から上水道敷設を要望する声が上がりはじめたのは大正3年(1914)頃。上水道敷設が実現するまで43年もの年月が費やされています。その間、人々は請願書や意見書を提出するなどして上水道敷設を訴え続けていたようですが、建設資材不足や町財政の逼迫等、様々な事情で後回しになり、すぐには実現されませんでした。

そうしているうちに赤痢の集団感染・洪水が発生。多くの犠牲者が出たことを重く受け止め、昭和30年、上水道敷設が町議会で可決されました。2年後には工事が完了し、人々が待ち望んでいた上水道敷設が実現。ようやく、蛇口から水が出るようになりました。

より充実した水道へ

上水道が整い、蛇口をひねると水が出るようになりましたが、今度は別の問題が発生。

当時、最上川右岸の井戸を水源としていましたが、生活様式の変化により水道水の使用量が増加し、徐々に水量が不足していったのです。抜本的な解決策として、十分な水量を確保できる最上川の表流水(河川を流れる水)に水源を求めることになりました。

これに合わせ、同じく井戸を水源としていた山辺町・山形市の水道施設と合併。昭和42年4月、「最上川中部水道企業団」が発足し、1市2町共同で水道事業に取り組みことになりました。

さらに、平成2年には寒河江ダム(西川町)が完成します。これに伴い、県は寒河江ダムを水源とする「村山広域水道用水供給事業」として、寒河江川流域周辺市町【図】に対する給水を始めました。これに合わせ、最上川中部水道企業団では配水池や配管を整備。村山広域水道(以下「村広水」と表記)から1日最大7495m<sup>3</sup>を受水できるようになり、当町の水道はより充実したものとなりました。

# 中山町の水道の歴史

「蛇口をひねれば水が出る」が当たり前になるまで

上水道敷設までの長い道のり



## この水、どこから？ 意外と知らない水のこと

飲み水、手洗い・うがい、入浴、洗濯。挙げればきりが無いほど、水は私たちの生活に密着しており、健康や清潔を保つため、欠かすことができません。

でも、その水がどのような過程を経てご家庭に届くかご存知ですか？ どの水源から取水され、どのように品質が管理されているのか。なんとなく想像はできて、改めて考えてみると分からないという方も多いと思います。

今月号では、生活に欠かせないものなのに、意外と知られていない「水」に注目してみます。